



■主な内容 —ルーマニア特集号—

- ・ルーマニア大会特集
  - UIFA第15回大会会議報告
  - 会議日報（10月1日～6日）
- ・海外交流の会報告
  - 第41回（ドナウ川とルーマニア）
  - 第42回（ルーマニアの建築）
- ・ルーマニア大会ポストコンgresツアー
  - 旅日記
  - ハイライトは巡礼の旅
  - 遅昼の腹ごしらえ



船上のド・ラ・トゥール会長  
(撮影：中野晶子)



ヤシ市街を一望出来る丘にある要塞型のチェタツィア修道院  
(スケッチ：柳澤佐和子)

## ルーマニア大会特集号

■ 第15回UIFAルーマニア世界大会会議報告について

正宗 量子

□テーマ “Identity” 参加者 25カ国 125名

2007年10月1日から6日迄の6日間の会議は、首都ブカレストで開催された。登録後、コンgresバッグを配布され、会議はド・ラ・トゥール会長の大会宣言に始まった。会場は歴史あるイオン・ミンク建築大学構内と農民博物館内。世界の会員参加者は約125名、参加国25ほどだ。日本の参加者は同伴者を含め総勢24名。日本語



農民博物館に掲げられた第15回世界大会の横断幕  
(撮影：井手幸子)

同時通訳の対応があった。今年の議題の“Identity”についての各発表は、伝統遺産修復術と近代化(ルーマニア)、都市開発の現状(ロシア)、古民家再生(デンマーク、日本)、各国の女性建築家の活動、自然と循環型建築(アメリカ)、近代建築の

Identityが地方に及ぼす影響(フランス)、一女性建築家の軌跡(アルゼンチン)など等。UIFA JAPON災害復興見守りチームの中越地震における法末村落のIdentityを再確認し取り戻す活動報告は、参加者の興味をそそったようだ。世界の世相を反映しつつ古きものと近代建築の狭間でIdentityの核も違い揺らいでいる姿が多くみられた。6セッション中の第3セッションで、小川会長と松川副会長がモデレーターを務めた。ユニークなプレゼンスペース作りや、現地での急ごしらえのパネルで参加した人などを含め、充実したパネル展示が両会議場を埋めていた。

□会期中の充実した企画

会議と並行し、チャウシェスクの遺産・総大理石の「国民の館」見学、アテネ音楽堂での民族音楽とピアノ演奏会の夕、農村博物館見学、ブカレスト市内エクスカーション、Mogosoiaという貴族の館に集い、ルーマニア民族音楽とダンスに会員も参加興じ、黒海を海軍の練習用帆船でクルーズしたコンスタンツァへの一日観光とい

う充実した企画を体験した。そして、会議の最終日はイオン・ミンク建築大学の中庭でbuffetの昼食をいただきながら、会議のみで帰る人との別れを惜しんだ。

この国を読み解くところみに対し、背骨となるカルパチア山脈と気候風土・農耕牧畜文化、ダキアから始まり様々な民族が行き交い、1989年共産圏から抜け今年1月にEUに参加したこの国の歴史は難解だ。その歴史をどのように評価し未来につなげるか、会議やポストコンgresツアーを通じ、この国のIdentityを模索する様子が、大会運営スタッフのエネルギーとホスピタリティの中に深く感じた会議だった。次回は隣国韓国と決定。UIFA JAPON会員の多数参加は、各々の人生にとって必ずやプラスとなるに違いない。



閉会式後イオン・ミンク大学前で記念撮影

(写真提供：松川淳子)

第43回海外交流の会のお知らせ

日時：2008年2月9日(土) 14:00～16:00

タイトル：UIFAルーマニア大会の報告会

会場：女性と仕事の未来館 第1セミナー室

内容、申込等については、追ってお知らせいたします。

第1日(Oct. 1, MON) 再会

石川 弥栄子

夕方6時にホテルに集合、バスでウェルカムパーティーの会場となる「国民の館」に向かう。久方ぶりの再会に感動の言葉と熱い握手が交わされ、華やかな場面が繰り広げられている。



ウェルカムパーティー (写真提供: 石川弥栄子)

「国民の館」では、入館前に警官の身体検査を受ける。ガイド嬢に先導され、革命前の政権がその威圧を誇るように建てた各室を見て回ったが、一部は国際会議場や展示場として利用されている。天井の高い大きな広間が何室も続き、過大なスケールの連続で落ち着かない気分のなか、贅沢な材料で様々な腕を見せたクラフトマンや、特注のカーテンや絨毯を作った修道女たちの努力が、より身近な形で市民のために活用されることを願った。

テラスに出て眺めた夜景で、人間らしさを取り戻したように感じられたが、この館の一部屋でウェルカムパーティーが開催された。カメラと名刺を持って各テーブルを賑やかに回る姿も見られ、再会の喜びに沸いている。私たちのテーブルでは、日本の女性の建築家の地位や仏教建築について質問があり、訪ねたことのある高野山の広い境内と建物のすばらしさを褒めて頂いたり、9年前の東京大会の思い出も語り合った。

お料理も美味しく話題も尽きないなか、バスに分乗しホテルに戻る。昼間は暑かった市内も温度が下がり、夜風が心地よく感じられた。

第2日(Oct. 2, TUE) オープニング

小渡 佳代子

会議は「アイデンティティ」保護・保存・国家的な建築遺産の価値についてのテーマで、ブカレストのイオン・ミンク建築大学のプレスコ画の講堂で開催されました。主催国ルーマニアのガブレア議長の司会で、ド・ラ・トゥール会長が急速に発展した私たちの時代に、世界的な環境問題(自然科学・技術の現場や社会・経済においても問題が表面化している)を、作り手である私たちが昔の建物に学ぶ機会をルーマニアで会議を開催することは有意義なことと話された。続いて、建築家協会会長、大学の学長、土木工学の検査長ダリナ女史の挨拶がありました。



壁画のある階段教室でのセッション (撮影: 安武敦子)

オープニングセッションは会場となった大学の学生による「アカデミエイ通りからのエントランス」の「アイデンティティ」をテーマにした作品の発表等があり、作品はパネル展示のコーナーを華やかに飾っていました。



パネル展示 (撮影: 安武敦子)

夜は美しいアテネ音楽堂で、民族音楽パンフルートの演奏とクラシックのピアノ演奏をダブルで楽しみました。

夜は美しいアテネ音楽堂で、民族音楽パンフルートの演奏とクラシックのピアノ演奏をダブルで楽しみました。

第3日(Oct. 3, WED) 全体会議と農村博物館見学

御船 杏里

農民博物館にて全体会議。発表は、ルーマニア、日本、スウェーデン、ベルギーの計6テーマ。松川淳子・安武敦子・寺本嘶子チームは、新潟・法末地区の地震被害地再生計画、中野晶子は、古い民家のリノベーション。両者とも活動を通して、アイデンティティを「取り戻す」あるいは「再確認する」様子を報告。各国の具体的な内容はさまざまだが、大枠での問題意識は共通、国を超えての交流・対話の重要性を再認識した。



農村博物館 (撮影: 御船杏里)

農村博物館は、ブカレスト中心部ノルド駅より北へ約2KM、ヘラストラウス湖畔にある。18.19世紀のルーマニアの農村の住まいを再現、広大な屋外に300棟近い木造家屋がある。木々が黄色く色づき、おだやかな陽気の中、一軒ずつ訪ね歩いた。昼食は、2階建ての木造家屋にてルーマニア料理、「エカウ」(ビーフスープ)「サルマーレ」(ロールキャベツ煮)など。夜は農民博物館に戻って、オープンエアの開放的な夕食。焼きもののカップに特産の赤ワイン。三々五々に解散、ホテルに着いたのは夜の11時をまわっていた。

第4日(Oct. 4, WED) 農民博物館でのセッションとブカレストエクスカレーション

小林 純子

4日目はデンマーク、ルーマニア、USA、ブルガリア、フランス、アルゼンチンの発表があった。建築やまちの歴史的価値の発見と再構築の実践例、元共産圏からは個の存在を拒否され家族の絆の重要性を確認し住宅で具現化した例、また粗略にされた歴史的建築物保存の重要性、女性の社会的地位未確立国からはその役割の歴史的的分析確認が自らの方向性の確信をもたらすとの報告があった。午後からはブカレスト市内見学とフェアウェルパーティー。市内は元小パリと呼ばれただけあって緑深き公園や歴史的な建築物や教会も多く残っていた。高層建築物は見なかった。私個人は公衆トイレから公的サービスが住民本位レベルに至っていない事を推測した。それはトイレの数不足、不十分な清掃管理、ユニバーサルデザインの未整備に見えた。夜のパーティーは、ルーマニアの民族舞踊や音楽の披露があり、また他国の方と身振り手振りで交流を楽しんだ。今回、私の見たUIFA世界大会での最大の収穫は、女性建築家の立場を切り開いてきた諸先輩の現在も健在である、しなやかでたくましい人間性とバイタリティーであり、私も大きな「元気」を得た。



ローマ広場(ロムルスとレムス)の小パリの景観 (撮影: 井手幸子)

第5日(Oct. 5, FRI) コンスタンツァへの1日エクスカージョン 安武 敦子

5日は会議はなく、早朝から3時間をかけバス3台に分乗し黒海沿いの都市コンスタンツァに向かう。



黒海船上で日差しを楽しむ (撮影: 安武敦子)

途中の道は収穫の終わったジャガイモ畑とブドウ畑が続き、あまりの広大さに日本の自給率の回復は難しいな等と考えながら、外を見たり、眠ったりを繰り返した。日が昇り、少し暖かくなってきた頃に中高層のマンションが目につくようになり、コンスタンツァに入った。

鉄道駅と港湾部が離れているとは聞いていたが、新旧の対比は明らかで港湾部は古い佇まいと言えば響きはいいが、抜け殻のような印象。旅客船は就航しておらず、軍と貨物の行き交う港から私たちは軍の練習帆船に乗って6時間の黒海クルージングとなった。

船上ではとくにプログラムは用意されておらず、銘々談笑したり、スケッチをしたり、船内を探索したり、昼寝をしたり。私はやや時間を持て余しながらも、日本やオランダ、ブカレストとは違う日差しや薄い潮の香り、船の揺れなど自分のなかのいろんな感覚が機能している感じを楽しんだ。

第6日(Oct. 6, SAT) 今大会のまとめから次回へ

小川 信子

10月6日は、会議の最終日であり、10時から事務局会議が行われた。ド・ラ・トゥール会長から、大会のまとめを行い、ユネスコに提出したいという意向が出され、下記のような意見交換が行われた。



韓国代表による次回開催国立候補 (撮影: 松川淳子)

- ・研究・作品の発表をした人は、文章及び写真など提出のこと。紀要を作成し(英語とルーマニア語)、国立図書館・アーカイブに保存。

- ・ヴァージニア工科大学デュネイ教授より、アーカイブを創設して25周年になり、既大会の記録を保存し続けていることと、特に女性建築家の記録が少ないので、次の世代のためにも保存を継続したい。

- ・保存技術が進み、インターネット上での情報交換や、ネットワークづくりを提案。若い世代の参加を見込みたい。

- ・歴史的な建造物などの保存と共に、建築の著作権を検討する必要がある。

- ・大会テーマの「Identity」は建築家の日常生活の中から出ているので、各国の特徴がみられた、等。

次回、第16回大会は韓国ソウルに決定。代表のベア教授の受け入れ挨拶。開催時期は2010年9月末から10月初旬頃。テーマは「伝統と技術(新しい技術)」皆さんの意見をお願いしたいということであった。

ド・ラ・トゥール U.I.F.A 会長と、ガブリア U.F.A.R 会長に花束を贈り、その後、全員で記念撮影して大会が終了した。

但し残念なことに、今回は代表者会議が途中から全体会議に移行してしまい、参加できない方々が多数出るといふ何事もない不規則な結末に終わった。

第41回 「ドナウ川とルーマニア—歴史と民族の多様性」の講演を聞いて 吉田 洋子

いろいろと興味深い小松義夫さんの講演でした。写真家である小松さんの人となりによるところが多かったと思うのですが写真の被写体と距離がない、反対に写される方からすると人も動物も建築などのものも小松さんに対して安心して居るといふことに驚きを感じました。写真紙芝居という方法もとてもよい企画でした。「笑う羊」の写真にはしばしば見つけ続けてしまいました。いかにも剛健な感じの羊飼いとたぶんその羊飼いと小松さんに気を許している羊の笑い、なかなか圧巻の写真でした。



小松義夫講師 (撮影: 渡邊喜代美)

さて肝心のルーマニアのことですが小松さんの写真とお話でルーマニアの素顔がみえたように思いました。実は今回私は仕事の都合でルーマニアに行かれなかったのですが実際にルーマニアに行ったがごとく実感のあるご報告でした。

ルーマニアは今年の1月にEU加盟をしたのですが社会主義時代のルーマニアには中世そのままに継承された生活が残っており、小松さんの写真をみていますと時間が凍結して中世にタイムスリップしたような奇妙な感覚にとられました。小松さんも3、4周遅れのトップランナーとお話されていましたが普段スローライフとか言葉だけでいっている私たちに警鐘を鳴らすものでした。馬車にわらを積んでいる写真などをみていますと本当にゆったりと時間が流れている感じがしました。まるでルーマニアに行ってきたような気分になった講演でした。とてもよかったです。

第42回 太田先生とルーマニア

宮崎 玲子

このたびの太田先生をお招きした第42回海外交流の会・太田先生の「ルーマニアの建築」では、予定されていたUIFAの旅のルートに沿って、地形から各地域の特徴を示す建築まで、詳細に御説明頂きました。一般の方々を訪れることの少ない国ですので、大変有意義であったと思います。お忙しい中を誠に有り難うございました。



太田邦夫講師 (撮影: 井手幸子)

1981年の太田先生との出会いを思い出し、私のルーマニアの旅を述べさせていただきます。発展途上の社会主義の厳しいルーマニアへの旅に際して、既に訪問の御経験をお持ちの先生に、旅の know how を伺うためにお訪ねしたのでした。渋谷の蔵書に埋まるような先生の事務所で、モルダビア地方に点在する壁画が素晴らしい僧院群、西北部マラムレシュ地方の民俗が残る木造住居の村々の貴重なスライドを、一人占めにしては勿体ないほど堪能させていただきました。

先生から通関の難儀だったご経験を伺ってはおりましたが、モスクワ行きの列車での通関は尋常な応対ではありませんでした。ルーマニアではまず待望のスチャバの僧院を廻りました。次のバイアマーレへの移動にタクシーを使いましたが、丁度日曜日とあって、村ごとに違う民族衣装の人びとが礼拝を終わって路上を行き交い、絵のような美しさに素朴なマラムレシュの伝統に浸り切った1日でした。

2回目のルーマニア訪問は1986年、太田先生のプロジェクトによる木造フォーラムの旅で、ハンガリーからバスでバイアマーレに向かいました。途中の見学が長引き、国境でも手間取って、さらに1時間の時差によって、バイアマーレのホテルに着いたのは24時でした。当時のルーマニアでの移動は国営旅行社がすべてを扱い、国営ホテルでは真夜中にも拘わらずディーナーが待っていたことを、このたびの散会後のお茶の席で懐かしく述懐されました。1981年のルーマニアは都市も農村も日本の30年前(昭和25年頃)を思わせる経済状態で物乞いの人々にも出会いました。現在も中欧の中で素朴な部分が数多く残っている国とされています。

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4

第2押田ビル ㈱生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2007年11月27日

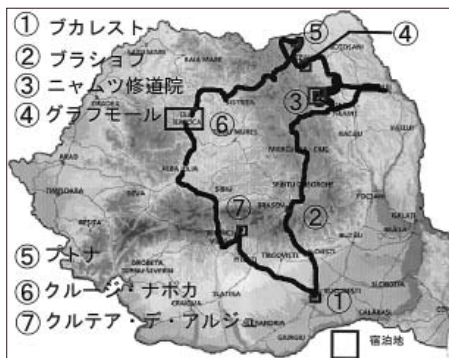
THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS OF QUANTITY OF LIFE DAINI-OSHIDA BLDG. 2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

十 十 ポストコングレスツアー 十 十



ポストコングレスツアーのルートと宿泊地 (MAP編集:石川和代)

■ 旅日記

石川 和代

10月7日、1週間で見慣れたブカレストの街並を後にバス2台でルーマニアほぼ1周の旅に出る。旅の始めはシナイア、ペレシュ城。曇りがちの天気も手伝って早くも肌寒い。更に北上する予定なので露店でセーター(50レイ、1レイ=50円)を買う。僧院を飾るモザイクの美しさに感動。夕刻、ブラショフに着く。町の中心の広場に続くホコ天は沢山の人が週末を過ごしていた。

10月8日、快晴の中、モルドバ地方に向け旅立つ。教会の尖塔が見えるときに集落を通り過ぎる、その繰り返しが家々の垣根は低く穏やかな田園風景。カルパチア山脈の大峡谷では迫力に圧倒された。

10月9~11日、モルドバ地方で修道院巡りの日々。北部のプロビナ地方に拠点を置きつつ10日は東部の古都ヤシにも足を伸ばす。道中で目にする民家は屋根の形や素材にバリエーションがあるが、多くの家で玄関前や横に列柱のある半戸外の空間があり、中央アジアの民家や日本の縁側に通じるものを感じた。11日プトナでの夜は遅い夕食にも拘わらず生演奏に誘われ深夜迄ダンスパーティーとなった。

10月12日、カルパチアを再び越えトランシルヴァニア地方へ。前庭を取らず道路に直接面する住宅が増え閉鎖的な印象の町並み。大きな門から覗く中庭は開放的で気持ち良さそう。夕方のビストリツァは雨だったが、私は東の間の町歩きを楽しんだ。

10月13日、クルージュ・ナボカで市場散策や両替をした後、クルテア・デ・アルジュへ。途中、アルバ・ユリア、シビウ2つの町を見学。休憩に入ったレストランのスープで体を温める。夜8時に見学したコジア修道院はちょうど礼拝の時間で信者達がごった返しているのに敬けんな雰囲気にあふれていた。

10月14日、旅の最終日は綺麗に晴れた朝。クルテア・デ・アルジュ修道院まで歩く。これが最後の修道院である。午後からは山の景色を見に行くグループとブカレストへ直行するグループとに別れる。それぞれに他国からの仲間と別れを告げ、満足する午後を過ごした。

■ ハイライトは巡礼の旅=世界遺産巡り

中野 晶子

Mon-archはギリシャ語で「一人で支配する人」の意。=君主

Mon-as-teryは、「一人で生活する」という意。=修道院。

私達は、ポストコングレスツアーで、この修道院と要塞教会を徹底的に案内された。全体の半分以下にせよ、12~13カ所は訪れたと思う。多くは世界遺産であり、民衆の心のよりどころであり、その姿も規模もインテリアも感動的であった。

主に石積みであるが壁は内外とも漆喰で塗られ、窓の奥行きで壁でさえ、フレスコ画でキリストとその弟子の生涯や、布教に勤めた聖人達の逸話がくまなく描かれ、オスマン・トルコや悪魔の世界の恐ろしさなども表現されていた。屋根は木造の深い軒が飛び出してその外壁を保護している。

これらのMonasteryは、なぜ14世紀から17世紀にかけて、かくも多く建てられたのであろうか?

ルーマニアの統治単位が大きくなり始めたこの時代の王や王妃にとって、「献堂」は大変な名誉であり、戦勝記念であり、統治の手段でもあったようだ。要塞のように四方を囲んだ作りからも、万が一の外敵来襲の時には、物資と民を守ったであろう事は容易に想像できた。また修道士達はおそらく文化継承の担い手でもあって、聖書の解釈・イコンの制作・コラールによる楽譜なしの楽曲の継承も、民の教育のかたわら続けてきたのではないだろうか。

政治のシンボル=城ではなく、信仰のよりどころ(ルーマニア正教の)教会であったことが、この建造物を焼き討ちや地震に見舞われても、再建と修復へと促したようだ。社会主義政権下では壁面をチョークで塗りつぶして、ただの教会として存在を許されていたと言う。

どの規模の修道院も多くても7人から25人程度の聖職者によって運営されている。リンゴ酢や蜂蜜、葡萄酒、トゥモロコシ、羊毛などが自給自足され、カルパチア山脈に抱かれた水源が、この地の食文化を支えている。

■ 遅昼の腹ごしらえ — チョルバ(田舎風スープ)とルーマニア食

井出 幸子

ルーマニア正教では週の二日は乳製品のはいた食事とらないという。ニャムツ修道院の2日目の朝食は、なすのペースト(サラダ・ド・ヴィネテ)も、ポテトフライもマーガリンなのだそう。長テーブルを囲んだ修道院の食事が心に残る。荷馬車が車と共に当たり前に行き来する土地柄、素材がおいしい。トマト、パプリカ、ペンションの大きなピッチャー入りのヨーグルト、目玉焼きのおいしさには脱帽。プロヴィナのペンションでの白いチーズとポレンタ(ママリガ)と目玉焼きをぐちゃぐちゃにして食した前菜も目新しく、おいしかった。ルーマニアのみそ汁・チョルバといわれる酸味系田舎スープがおいしい。トランシルヴァニアの古都シビウ近くで食した肉団子入りチョルバは、連日の不規則な食事の長旅と氷雨に疲れた私たちの胃にはことさらに優しいスープだった。帰国後、みつけたレシピで早速試してみる。小麦粉を発酵させた酸味系調味料ボルシュの代わりに、リンゴ酢とレモンで試みたがルーマニアの味にはなりきれない。やはりボルシュか。リンゴとレーズンなどをサンドしたケーキがおいしい。リンゴはリンゴ酢としても多く使われているようで、酸味系味付けがマイルドだ。最終日クルテア・デ・アルジュで散歩中ひよんなことから何うこととなったお宅で供された、作りたてのプラムジャム入りクッキーは、旅の最後のデザートだった。



ヤシの文化宮殿(旧モルドバ公国皇太子邸)(スケッチ:柳澤佐和子)



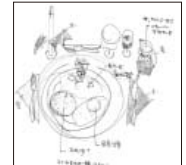
プトナの朝(撮影:井手幸子)



市場で買った木彫の笛を手に(撮影:野田杏葉)



修道院にチーズを届ける(撮影:井手幸子)



ママリガと白チーズと目玉焼き(スケッチ:井手幸子)



クルテア・デ・アルジュのステレス婦人とクッキー(撮影:井出幸子)



プトナの要塞教会



聖人ニコラス(フレスコ画)



献堂(フレスコ画)



プトナ修道院の「鳥居」(撮影:中野晶子)

■ 役員会報告

第4回 2007年7月18日:英文併記号(71・72合併号16ページ)は、7月25日発行予定と報告。総会・記念講演会のまとめ及び41・42回の海外交流の会の準備状況の報告、承認。2007年度総会議事録について審議、承認。外堀カナルカフェイベントの案内。中越沖地震について法末の被災状況について報告があり、募金を行うことにした。

第5回 2007年8月16日:73号の企画内容(ルーマニア特集11月発行)について報告。災害復興見守りチームの活動について報告。41回海外交流の会(8月25日実施)について準備状況の報告及び役割分担の決定。世界大会についての参加人数と準備状況の報告。中越沖地震での法末集落への被災お見舞い金20000円が集まり、集落総代に渡されたことが報告。飯塚邸(坂倉準三設計)保存活動と軽井沢移築に関する経過報告。第6回 2007年9月12日:71・72合併号の世界大会配布方法と73号の企画内容(ルーマニア特集11月発行)について報告。41回海外交流の会(8月25日実施)についての結果及び収支報告。42回海外交流の会(9月15日実施)について準備状況報告及び役割分担の決定。成瀬記念

講堂を蘇らせるシンポジウムについての案内。

第7回 2007年10月23日:ルーマニア大会についての概要報告。災害復興見守りチームの活動について報告。73号の進捗状況について報告。42回海外交流の会(9月15日実施)について結果及び収支報告。43回のブカレスト大会報告会の開催日程を2月9日決定。(海外交流の会で集めた義捐金は柏崎市長に)建築士会女性委員会公開シンポジウムの案内

■ 編集後記

国土も独自の民家も宗教の継承も素晴らしい国。ブカレストの建築関係者は、もっと誇りを持って良いのでは、(中野)ルーマニアの印象が、それぞれの人で違う。かき集めて全体像に近づきたい。(須永)質の高い文化の気配が色濃く残り、その資産を継承・発展させる社会システムを模索中の国だったように思える(井出)次世代に国境のない世界を望みつつルーマニア報告を読む(渡邊)今号から印刷所の担当者が変わりました。前任の丹生さん有難うございました。後任の外崎さん、これからも宜しくお願いいたします。(編集長・石川)